

書評：久富善之・佐藤博編『新採教師はなぜ追いつめられたのか』  
(高文研、2010年)、『プランB』第29号(2010年10月) 9頁。

西川伸一

私の妻は私立の中高一貫校の教員をしている。その働きぶりは慢性過労状態  
といってよい。朝7時過ぎには家を出て、帰ってくるのは早くて夜7時半ちか  
く。遅いと9時すぎになることも珍しくない。それからようやく遅い夕食をと  
るのだ。土日も部活動の引率でしょっちゅう出かける。さらに、家にも生  
徒や父母から電話がかかってくれば、それに対応しなければならない(これが  
夫婦げんかの元凶です)。家でぐうたらしているだけの私には、目の回るような  
日常である。

幸い、私のような大学教員が過労死ないし過労自殺したという話はきかない  
が、小学校や中高の先生のそうした悲劇はよく伝えられる。本書は三人の新採  
教師の自殺に焦点をあて、そこから浮かび上がる学校現場の構造的問題を明ら  
かにしている。「学校内の労働時間や土・日の出勤に加えて、就寝は午前一時頃  
で、朝六時半には自宅を出る。睡眠不足が続き、この間の超過労働時間は一カ  
月一〇〇時間を超えていたと推測される」という彼らの勤務状況を知るとき、  
うちの妻などまだ「人道的」だとさえ思えてくる。

先生たちには、教壇を離れても実に様々な仕事がふりかかってくる。授業準  
備や教材研究、テストづくりやその採点にとどまらず、保護者と毎日やりとり  
する連絡帳のチェックと返事書き、学級通信の作成、給食や掃除の当番表の制  
作。深夜に保護者から携帯電話に連絡が入ることもある。さらに、新採教師は  
一年間、初任者研修が義務づけられ、指導教師に研修の記録を毎日提出する。

新人が最初から一〇〇点満点というわけにはいかない。その点を含んだ保護  
者や先輩教師からのあたたかい励ましがあれば、彼らは徐々に成長していける  
だろう。しかし、本書で取り上げられている三人の先生の場合、まったく逆で  
あった。二人はモンスター・ペアレントからの理不尽な要求(連絡帳にびっし  
り書いてくる)や暴言(「保護者を見下している」)に精根尽き果てた。もう一  
人は担任したADHD(注意欠陥・多動性障害)の疑いのある子どもに手を焼  
いていたところ、先輩教師から「アルバイトじゃないんだぞ、ちゃんと働け」  
と罵られ、最後の心の支えを失った。

そして、より気が重くなるのは、こうした悲劇がたまたまモンスター・ペア

レントやひどい先輩教師に遭遇してしまったことから生じた偶発的事件ではないことだ。校長や副校長といった管理職はどう応じたのか。苦しむ新採教師をかばうどころか、苦情を寄せた保護者に対して、あるいは他の教師が全員いる場で彼らの「不対応」を謝罪させたのである。つまり、むしろ責める側に立って新採教師を決定的に追いつめてしまった。

背景には学校現場への競争原理の導入がある。短期の成果主義による業績評価や「学力テスト」「学区自由化」が競争をあおる。たとえば、区内の全区立中学校の「学力テスト」の学校別成績がHPで公開される。いきおい「自分の業績をあげる」ことで頭がいっぱいの校長も少なくない。彼らはそのために強引な人事異動をやったり、研究指定校を引き受けたりする。こうした管理職の下で、教師の多忙とストレスは構造化し、その最悪のしわ寄せが新採教師に及ぶのである。「無責任な私をお許してください。全て私の無能さが原因です。」しかし、決してこの新採教師の資質に問題があったわけではない。

文部科学省の統計によれば、二〇〇七年度を通して、うつ病など精神疾患が原因で休職する教員は四九九五人に達した。これで一五年連続して過去最多を更新したという。窒息しそうな現場を物語っていよう。

さて、きょうも妻の帰宅が遅い。これから子どもたちと三人で食卓を囲むところだ。